

窓

「窓」に寄せる思い

「教育に寄せる心を開く小さな「窓」
小さな「窓」から広がる教育の世界が見えてきます。」

福島県教育センター



「唯一生き残るのは、変化するものである」

研究・研修部長 味原 正美

教育は「未来を創る」営みと言われます。教育センターでは、こうした重要な仕事に携わる教職員の皆様の「資質・能力の向上」をめざして「明日の福島の教育をつくる」を合い言葉に所員一丸となって職務に励んでいます。

平成28年度は、小・中・高の基本研修の中に「2年次教員フォローアップ研修」が加わり、新たな体系で研修を行いました。採用2年目の先生方の研修意欲は高く、研修の感想には、次のようなものがありました。

- 1年経験したからこそ2年目での授業づくりの悩みというものが出てきた。今回この研修を受けて、その悩みがすべてではないが、すっかりできたものも多かった。何より研究ができること、そして教師として学んでいることに楽しさと感謝を感じることでできた一日だった。
(小学校)
 - 1年目とは異なり少し自信をもって参加することができました。本研修では、課題をなくせたというよりも、新しい課題に出会えたという感じでした。まだまだ教師としては未熟なので「学び続ける」気持ちを忘れずがんばります。
(中学校)
 - 「目的」として言語活動を利用するのではなく、主体的な学びを与えるきっかけの方法の一つとして利用すべきであることを改めて理解した。主体的な学びを引き出せるような工夫を絶えずしていきたい。
(高等学校)
- 私たち教育センター所員も2年次教員の意欲におおいに励まされました。

さて、平成29年度は、総務管理部の「クラウド・サービス」という重要な業務のほか、研究・研修部の大きな三つの柱「研修事業」「調査研究事業」「カリキュラムセンター事業」を次のように行ってまいります。

1 研修事業

職能研修では、来年度から「校長のためのマネジメント講座」「教頭のためのマネジメント講座」「新任教務主任研修会」の中に「カリキュラムマネジメント」の講義・演習を追加し、

次期学習指導要領の主旨を踏まえ、学校全体が授業改善を含めたカリキュラムをどのように改善していけばよいのかについて研修を行うこととします。

専門研修はどの教科もアクティブ・ラーニングの指導法を取り入れたものを準備しました。また新たに「主権者教育の実践に向けた授業づくり講座」や「授業力向上のためのICT活用基礎講座」を新規に立ち上げます。

2 調査研修事業

チーム研究として「思考力を高める問題解決的な学習指導の在り方」「タブレットPC等の特性を生かした効果的な利用法に関する研究」「生徒指導・教育相談における児童生徒を支援する力を高める研究」の三つのテーマで行っていきます。併せてチーム研究と関連をもたせながら長期研究員15名の研究も行っていきます。11月30日(木)に予定している『福島県教育研究発表会』において、その成果を県内の優れた教育実践と併せて発表しますので、多くの教職員の皆様に来場していただければと思います。

3 カリキュラムセンター事業

今年度好評であった「情報モラル教育講座」や「小学校国語講座」「小学校算数講座」「学級集団理解の進め方」などの他、現地研究方式の「運動身体づくりプログラム講座」「小学校理科実験基礎講座」などの出前講座を多数開設します。平成29年度は、基本研修・職能研修・専門研修に合せて2,500名、『福島県教育研究発表会』に300名の教職員の皆様をお迎えし、そして出前講座等250件学校へ出向いていく予定で準備を進めています。

最後になりますが、進化論のダーウィンは、「最も強い者が生き残るのではない。最も賢い者が、残るのでもない。唯一生き残るのは、変化するものである。」と言いました。時代に合わせ、福島県の教職員の「資質・能力の向上」のため、教育センターも絶えず学び続け変化してまいります。来年度も子どもたちの「未来を創る」ために教育センターをご活用ください。

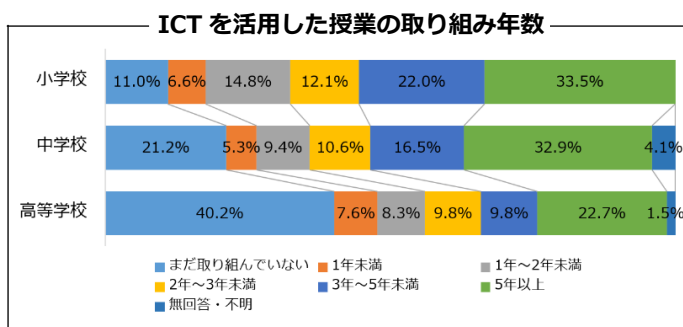
本誌に関するご意見・ご感想、並びに研修に関するご質問等がございましたら、下記連絡先までお寄せください。

編集発行： 福島県教育センター 〒960-0101 福島市瀬上町字五月田16番地
TEL 024-553-3141 (代表) FAX 024-554-1588
URL http://www.center.fks.ed.jp E-mail center@fcs.ed.jp

■教育ICTの活用について

情報教育チームでは、今年度、教育 ICT の活用について調査、研究を行いました。内容は、アンケートによる「ICT 活用に関する実態調査」、教育現場で利用されている機器の効果的な活用のための検証、ICT 活用事例の収集とその分析、そして、教育センター内での ICT を活用した授業実践です。急速な情報化やグローバル化の進展に伴い、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化しています。社会の変化に対応する力を身に付けるため、ICT を活用した教育の推進による情報活用能力の育成が求められています。今後もチームとして、教育 ICT の調査、研究を継続し、活用推進と情報発信を進めていきます。

■教員のICT活用に関するアンケート調査の紹介(一部抜粋)



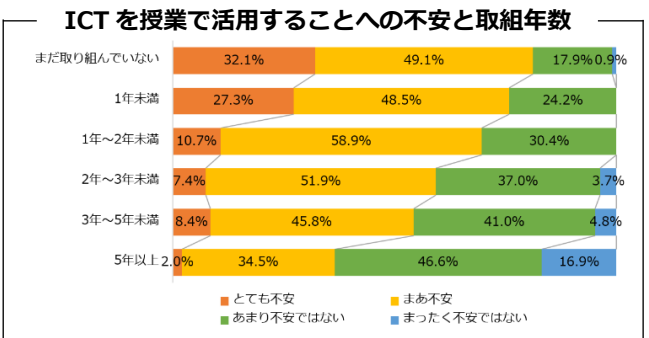
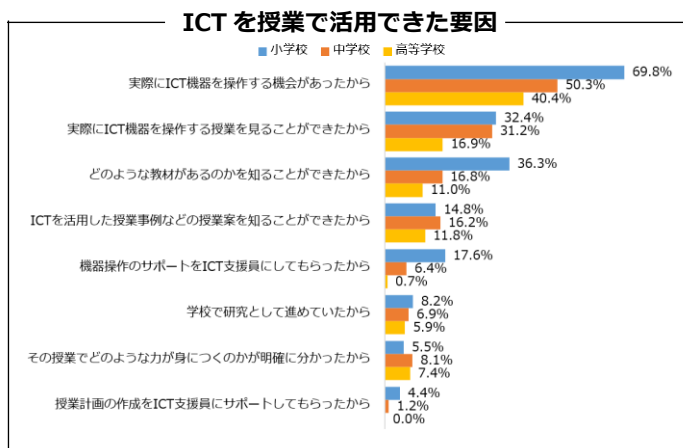
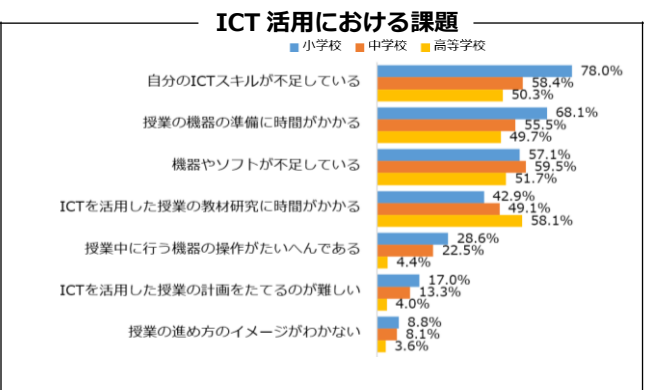
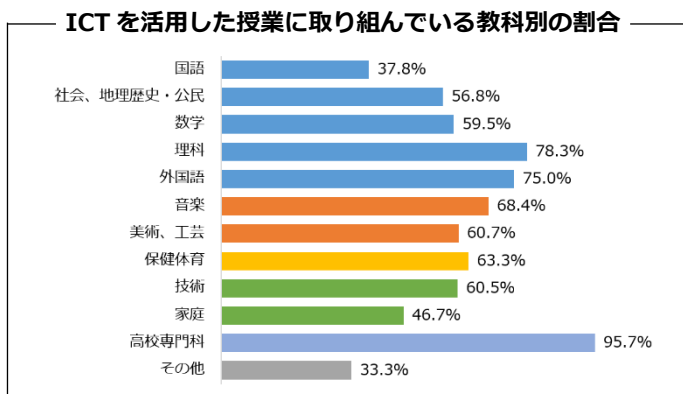
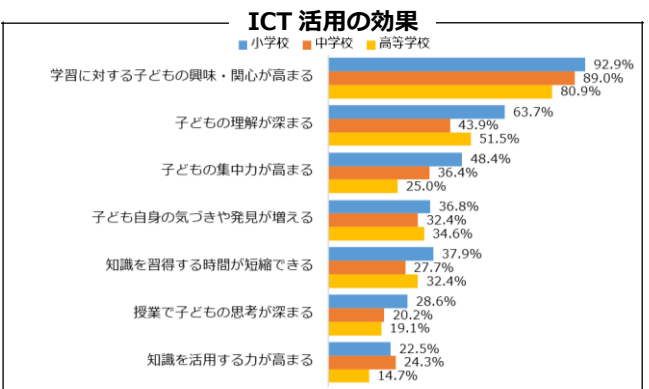
- 「まだ取り組んでいない」が小学校1割、中学校2割、高校4割
- 「5年以上」が、小・中学校で3分の1、高校2割

対象・抽出方法

初任者研修と2年次教員フォローアップ研修を除いた、基本研修・職能研修の教科を対象とした教育センター研修に参加した教諭

期間 平成 28 年 5 月～10 月

回答数 491 名 (小学校 182 名/中学校 173 名/高校 136 名)



- ICTの活用に取り組んだ年数が長いほど、不安を感じる割合が減る傾向

■授業における効果的な ICT 機器の組合せ「教科指導モデル構成」

教師が教科指導に ICT を利用する場面において、次のような[教師用タブレット PC]+[画面転送装置]+[拡大提示装置]の組合せによる活用を、初任者研修等において検証しました。画面転送装置を用いることで、教師は移動しながら利用することができ、授業での活用の幅が飛躍的に広がり、より効果的な指導が可能になります。



「教科指導モデル構成」



研修での活用の様子

教科指導モデル構成の利点

- ワイヤレス画面転送
自由に移動しながら利用可能
- 既存の拡大提示装置の利用
既存のテレビやプロジェクタを利用可能
- 電子黒板機能の利用
タブレット PC 側で電子黒板アプリを使用
- 教材準備の容易さ
教材はカメラアプリで必要な時に撮影
- 教材のさまざまな提示
電子黒板アプリにより、教材を拡大表示・マーキング・マスキング可能
- 書画カメラとしての利用
タブレット PC をクリップ等で固定することで、書画カメラとして利用可能
- 各種アプリ等の利用
アプリやインターネットの利用

■ICT 活用は「授業の目標を達成する」ため

授業で ICT を効果的に活用するために、活用の目的や意図を明確にする必要があります。まず、現在の授業を振り返り、問題点について課題意識をもちます。そして、その課題が ICT を使うことで改善できるか検討して、効果が期待できるのであれば実際に活用し、最終的には授業の改善につなげていきます。

・ ICT活用は「授業の目標を達成する」ため

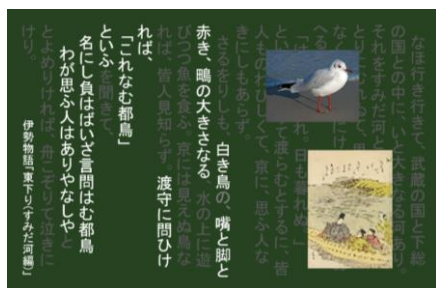
- 授業の問題点について課題意識をもつ
- ICTを使って改善できるか検討する
- 効果を期待して実際に活用

授業の目的を達成し授業の改善につなげる



模擬授業での活用の様子

■ICT の効果的な活用例



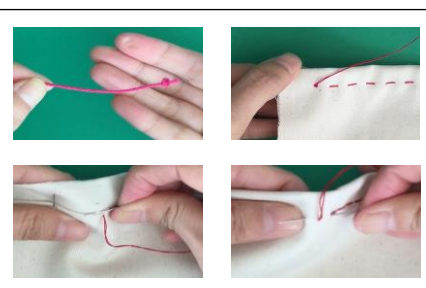
教科書本文の提示

本文を黒板等に拡大提示することで、板書する時間が省ける。また、関連する部分のみ表示して注目させたり、写真等を提示してイメージを共有させたりすることができる。



効率的な復習やまとめ

授業内容をスライドにコンパクトにまとめ、提示することで、前時の復習や本時のまとめを、構造的に概観することができる。



模範作業の拡大提示と繰り返し

教師が模範作業を拡大して見せることで、細かな部分の確認ができる。また、あらかじめ動画を準備しておくことで、何度でも確認させることができる。

□■教育相談チームからの発信■□

「問題行動等調査」の結果から見えるもの ～児童生徒理解に焦点を当てて～

今回は、平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）の結果から見える課題への対応について、「児童生徒理解」の視点から提案します。

◎生徒指導上の諸問題に関する県内と全国の状況（単位は件、かつこ内は前年度）

いじめの認知件数		1,000人当たりの認知件数	暴力行為の発生件数		1,000人当たりの発生件数
県内	1,220 (882)	5.8 (4.1)	県内	242 (159)	1.2 (0.7)
全国	224,540 (188,072)	16.4 (13.7)	全国	56,963 (54,246)	4.2 (4.0)

不登校の小・中学生		1,000人当たりの出現数	不登校の高校生		1,000人当たりの出現数
県内	1,862 (1,785)	12.3 (11.6)	県内	548 (513)	10.2 (9.4)
全国	126,009 (122,897)	12.6 (12.1)	全国	49,591 (53,156)	14.9 (15.9)

県内のいじめの認知件数は1,220件。調査開始以降最多かあ…。「冷やかしく、からかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」といった言葉によるいじめが半数以上を占めているのね…。

県内の暴力行為の発生件数も3年ぶりに増加に転じたのね…。

子どもの数は減ってきているのに、不登校の児童生徒の数は増えているのね…。

これらの状況は、子どもたちが不安や悩みを抱えたり、自身の欲求がかなえられなかったりする現状に対する葛藤の表現であるとも考えられます。

教育相談チームでは、先生方が子どもたちへの理解をさらに深めたり、深めた理解を活用したりすることで、子どもたちを適切に支援することができるようになることをめざした研修、研究を行っています。

教育相談チーム
ゆういち先生

□専門研修の紹介 ～2つの「学校教育相談講座」から～

◎ 児童生徒理解に関する講義・演習等の紹介

- ◆ 児童生徒理解に生かす学校教育相談基礎講座
 - 発達課題と児童生徒理解
 - 今日的な課題と学校教育相談
～いじめ防止と保護者理解を中心に～ など
- ◆ 児童生徒理解を深める学校教育相談実践講座
 - 児童生徒理解と学級集団理解
 - 特別な教育的ニーズのある児童生徒の理解と対応
 - 保護者とのよりよい関係づくり など

学んだことなどを総合的に活用

- 事例研究実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
※気になる児童生徒を選定し、一年間、小グループ単位でその子への適切な指導援助の方法を探る。

他の校種の先生方と話し合ったことにより、新たな視点でその子を見ることができるようになりました。

教育相談系専門研修は、どれも児童生徒理解を深めることができる講座となっています。ぜひ、ご参加ください。

子どもの立場で理解して、大人の立場で支援・指導することが大切です。

専門研修講師
はじめ先生

そのためにも、保護者とよりよい関係をつくることは大切です。

研修を受けた先生方

事例研究実践Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのようす

研修を受けた先生

お互いの事例を検討・協議することで、多くの気づきを得ることができました。

アプローチの仕方は一通りではないことを再確認することができました。

研修を受けた先生

研修を受けた先生

そうそう。その子への理解が深まると指導援助の幅が広がりますね。

コーディネーター
しんや先生

□チーム研究の紹介 ～「日常指導ふりかえりシート」の活用～

◎校内研修「自身の日常指導をふりかえる」

はじめに

◇ ウォーミングアップ

説明

◇ 児童生徒理解の在り方

○見る（知る）
学校生活における様々な機会を通して児童生徒に向き合う際に、児童生徒の姿や行動をありのままに見取る。

○読み解く（深める）
児童生徒の姿や行動の背景を様々な視点から探り、理解を深めていく。

○生かす（支援する）
深めた理解をもとに、児童生徒が生きる力を伸ばしたり自立したりすることができるよう、支援・指導する。

この理解に加えて


「主観」「客観」「共感」
の各視点から児童生徒を理解することが大切

理解したことを指導・支援につなげるためには、自身の日常指導の傾向を知らないとダメよね。

演習


◇ 演習①

「日常指導ふりかえりシート」を使い、自身の日常指導の現状や傾向を捉える。その後、4人組になり各自の具体的な取組について意見交換を行う。



◇ 演習②

演習①を基に、各自がこれから力を入れて取り組んでいきたい「日常指導」の内容を明確にするとともに、具体的な対応策を考え、4人組で自由に伝え合う。



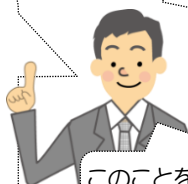
◇ 振り返り

それぞれの立場から気付いたことを話し合う。その後、話し合ったことを全体で共有する。

まとめ

◇ 研修全体の振り返り

今回は子どもたち一人一人を多面的・多角的に見ること、理解を深めること、支援していくことに焦点を当てた研修を行います。



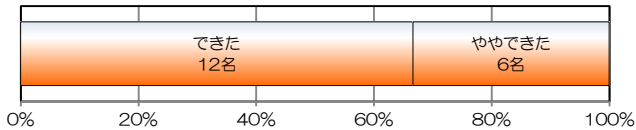
この時間のねらいは、自身の日常指導の現状と傾向を振り返るとともに、今後の日常指導の方針や目標を明確にすることです。

このことを通して、教員の児童生徒を支援する力の向上をめざします。

「日常指導ふりかえりシート」は学級経営が上手な先生方の工夫やコツを質問項目としてまとめたものになっています。

日常指導ふりかえりシート		質問項目	回答欄
1	教師や友達の話をよく聞くことができるように、話を聞く姿勢や目線、心構えなどを指導している。	4-3-2-1	自分の信じてやっていることが「日常指導ふりかえりシート」に載っていたので自信をもって続けていこうと思いました。
2	児童生徒の集中力や意欲を高めるために、話を聞きたくなくなるような工夫（教師の演技やジェスチャー、児童生徒とのやりとりなど）をしている。	4-3-2-1	
3	いじめられたり、排除されたりする児童生徒が出ないように、いじめを許さないことを児童生徒に明確に話している。	4-3-2-1	
4	暴力や悪口、からかいなどを見聞きした時には、それを見逃さず、迅速に毅然とした対応をしている。	4-3-2-1	
5	暴力や悪口、からかいをしてしまった児童生徒に対して、その理由を聞き心解した上で、自分の行為や相手の気持ちを取り返らせている。	4-3-2-1	
6	児童生徒が落ち込んで学校生活を送ることができるよう、学級展示や...	4-3-2-1	
7	集会や学校行事、教師用机、集会や学校行事に指導し、目標設定や...	4-3-2-1	
8	給食や清掃の準備や片付け、生活習慣の指導、...	4-3-2-1	
9	保護者との関係構築、保護者との信頼関係の構築、...	4-3-2-1	
10	児童生徒が授業で自信が持てるように、机間指導の際に考えの...	3-2-1	現状で足りない自分の日常指導の内容や、今後どのような指導をしていくべきかということに気付きました。
11	児童生徒が授業で活躍できるように、学習へ取り組む際のポイントを示したり、勉強の仕方を教えたりしている。	4-3-2-1	
12	児童生徒を深く理解するために、なるべくたくさん声をかけ、ささいな会話からも児童生徒の気持ちに寄り添えるようにしている。	3-2-1	
13	児童生徒を深く理解するために、作文や日記、生活記録などを通して共通の話題を見つけ、コミュニケーションに生かしている。	3-2-1	
14	いじめや孤立を防ぐために、そのような心配がある児童生徒に対して、周囲に声をかけたり話を聞いたりするようにしている。	3-2-1	
16	児童生徒が友達と遊ぶ機会を設けている。	4-3-2-1	研修を受けた先生方
17	学級のまとまりをもたせるために、ペアやグループでの協働学習を推進している。	4-3-2-1	
19	「学校は間違える所だ」ということを児童生徒に示し、互いに意見を自由に言い合える雰囲気づくりをしている。	4-3-2-1	
20	授業の中で、児童生徒同士が「予想・再生・換言」などの言語活動を行うことで、意欲的に話を聞ける雰囲気づくりをしている。	4-3-2-1	
21	学級がまとまって諸行事に取り組めるように、目に見える形でスローガンや目標を掲げ、児童生徒の意欲付けや意識付けを図っている。	4-3-2-1	
21	学級がまとまって活動していることを児童生徒自身が自覚できるように、他の学級・学年の先生と連携を取り、ほめてもらうようにしている。	4-3-2-1	

○「日常指導ふりかえりシート」から、自分の「日常指導」の傾向や特徴を知ることができましたか？



この機会に自身の日常指導を「児童生徒理解」の視点から振り返ってみませんか？



そして、今だからこそ全ての子どもたち一人一人を理解し、寄り添い、そこから理解をより深めていくことに努めてみませんか？

社会の変化に伴い、児童生徒、保護者、教員が直面する課題はますます複雑、多様になっています。教育相談チームでは、これからも児童生徒理解、保護者理解をベースに、先生方の生徒指導・教育相談に関する技能の向上に寄与したいと考えています。今後も教育相談チームをご活用ください。

平成28年度

長期研究員

研究成果一覧

今年度、教育センターには15名の長期研究員がおり、高等学校の5名は1年間、小・中学校の10名は2年間の研究に励んでおります。この長期研究員は理論的、実践的な教育研究を通して高い専門性と研究する力を高めてきました。それぞれの研究主題・副主題、研究のポイントをご紹介します。

「話すこと・聞くこと」領域における、小・中の学びをつなぎ、思考力を育む指導の工夫 —小中交流授業による協働的な学びを通して— (H27・28年度)

(小) 国語 瀧田 和也 (郡山市立湖南小学校)

「共同化・表出化・連結化・内面化」の過程を繰り返しながら、思考力の育成を図る学習モデルを提案しました。小・中学校の教員が、学習のイメージを共有し、効果的に異学年の交流を位置付けた授業実践を紹介します。



※ 所属校は、平成29年3月現在のものです。

小学校社会科における多面的・多角的なものの見方や考え方の育成 —震災を経験した地域素材を活用する単元構成の工夫を通して— (H27・28年度)

(小) 社会 平野 俊一 (二本松市立油井小学校)

多面的・多角的な見方や考え方の中に「震災」という視点を加えることで、そこに関わる「人・もの・こと」の姿から福島県ならではの社会科の学びが展開できると考え、授業実践を行いました。



算数科における「活用力」を育てる学習指導の工夫 —身に付けさせたい数学的な考え方を明確にした対話的な学びを通して— (H28・29年度)

(小) 算数 渡邊 佳央里 (矢祭町立矢祭小学校)

三つの視点(教材・他者・自分)での対話的な学びを工夫することで、数学的な考え方のよさを感じとらせ、「活用力」の育成を目指す授業実践を行いました。



科学的な根拠に基づく「判断力」を育む小学校理科の授業 —地域での防災・減災を視点とした問題解決を通して— (H27・28年度)

(小) 理科 菅野 望 (福島市立鎌田小学校)

地域の自然環境の特徴や災害に関する知識を活用して、災害時の避難行動を考えさせる活動を設定し、子ども一人一人に自分の命を守る最善の行動を的確に判断する「判断力」を育成することをめざしました。



小規模校の児童の他者と関わる力を育てる研究 —小規模校のよさと教育相談の手法を生かした実践を通して— (H27・28年度)

(小) 教育相談 小松 光恵 (鮫川村立青生野小学校)

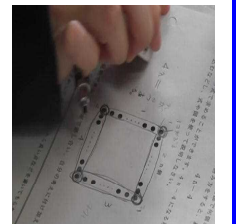
小規模校の今あるよさを積極的に活用した「道徳の時間」「日常指導」「家庭との連携」を通して、児童の自信を育みながら、他者と関わる力の向上をめざしました。教育相談の手法を効果的に取り入れた実践を紹介します。



論理的な思考力・表現力を高める中学校数学科の学習指導の在り方 —記述表現活動を効果的に位置付けた協働学習を通して— (H27・28年度)

(中) 数学 佐藤 智哉 (郡山市立郡山第四中学校)

「学習課題に対する自分の考えをまとめる」「協働学習の場において説明し伝え合う」「振り返り表現し直す」の各段階において記述表現活動を効果的に位置付けることで、論理的な思考力・表現力を高める指導の有効性を検証しました。



主体的な読みの力を高める「読むこと」領域の指導の工夫 —「理由」の構築に向けた詳述と相互説明活動を通して— (H27・28年度)

(中) 国語 齋藤 司 (郡山市立郡山第七中学校)

「理由」の構築をめざした詳述と相互説明活動を手だてに実践しました。叙述(「根拠」)に基づく「理由」を明確にさせ、一人一人に説得力のある考えを形成させるを通し、主体的な読みの力を高める指導の在り方を探りました。



科学的な思考力を育む中学校理科の授業
 ー仮説と結び付けた結果の分析・解釈を通してー
 (H27・28年度)

(中) 理科 鳴原 卓 (郡山市立大槻中学校)

「仮説設定シート」を用いて生徒主体の実験仮説・計画の立案を行い、仮説と結果を結び付け、仮説の妥当性や改善の視点から結果を分析・解釈させることで、科学的な思考力を育むことをめざしました。



場面や状況に応じて話し力を育成する指導の在り方
 ー即興で話す活動をめざした段階的な指導過程を通してー
 (H28・29年度)

(中) 英語 松本 聡二 (矢吹町立矢吹中学校)

実際の英語を話す場面で求められる力を育成するために、段階的な指導と、振り返りのある学習サイクルを基に、ペアやグループでの学習形態を工夫して授業を実践しました。



インターネットの問題に自ら対応する力の向上を図る情報モラルの指導
 ー学校と家庭をつなぐ、道徳及び特別活動における指導を通してー
 (H27・28年度)

(中) 情報教育 笹川 光威 (会津若松市立第二中学校)

情報モラル教育において、道徳の時間と特別活動(学級活動)の関連を図るとともに、授業のワークシートを介し、学校と家庭が協働して取り組む指導の在り方について、その効果を検証しました。



テキストの内容を踏まえ自らの考えを表現する力の育成
 ーフィンランド・メソッドを援用した指導を通してー
 (H28年度)

(高) 国語 高橋 敏哉 (福島県立葵高等学校)

テキストの内容を踏まえたオープンエンドな発問によって、自分の価値観や人生観を基に思考・判断させる機会を設けながら、明確な理由や根拠をもって自分の考えを書いて表現する力の育成をめざしました。



現代社会に主体的に生きる自己を確立するための思考力の育成
 ー社会的事象を身近にとらえさせるアクティブ・ラーニングを通してー
 (H28年度)

(高) 社会 緑川 祐 (福島県立光南高等学校)

学習した社会的事象を暗記で終わらせることなく、いかに自己の生き方に反映させるか。他面的・多角的な思考に基づいた主体性の確立をめざし、「対自化」「相対化」「深化」の過程を通して実践した例を紹介しします。



問題解決の過程において、数学的な思考力を育むための指導の工夫
 ー問題形成・把握の段階における数学的な考え方を意識した活動を通してー
 (H28年度)

(高) 数学 半谷 徳夫 (福島県立相馬東高等学校)

問題解決に当たり、片桐重男氏の提唱する「数学的な考え方」を意識して問題を把握させることに重点をおいて実践しました。生徒が問題の本質をとらえ、様々な角度から深く考え取り組むことを通し、数学的な思考力を育むことをめざしました。



音声活動を重視した、言語運用能力の正確性を向上させる指導
 ーICTを活用したリフレクション活動を通してー
 (H28年度)

(高) 英語 川村 智 (福島県立相馬高等学校)

コミュニケーションにおいて、流暢さが重視され、発音の正確性が軽視される傾向があります。そこでICTを活用して、正確な発音をすることにも注意を向けさせる指導を紹介しします。



高校生の人間関係を構築する力の向上をめざした研究
 ー「聴く」ことに重点を置いた支え合う活動を通してー
 (H28年度)

(高) 教育相談 黒澤 絵里香 (福島県立保原高等学校)

コミュニケーションの中でも、特に「聴く」ことに重点を置いた活動をLHRとSHRを活用して実践しました。それにより、互いに支え合う気持ちを高め、人間関係を構築する力の向上をめざしました。



紹介した長期研究員による各研究の詳しい内容につきましては、「平成28年度研究紀要第46集」「平成28年度長期研究員個人研究報告書」をご覧ください。また、これらは本センターWebサイトから御覧いただくことができます。

<http://www.center.fks.ed.jp>



平成28年度 福島県教育研究発表会

「明日の福島の教育をつくる」をスローガンに、福島県教育研究発表会が11月25日（金）に本センターにおいて行われました。

今年度は、学習指導、教科指導、情報教育、放射線教育、食育等の21テーマについて、研究・実践発表が行われました。また、東京大学高大接続研究開発センター教授 白水 始 氏による講演『21世紀に求められる資質・能力の育成と授業づくり』が行われ、次期学習指導要領改訂を踏まえ、資質・能力のあり方、授業改善のためのカリキュラムマネジメント、協調学習による授業づくりなどについて実践的で分かりやすいお話をいただきました。

おかげさまで、本年度は約200名の参加をいただき、教育研究発表会を無事終了することができました。来年度も実り多き研究発表会となるように準備を進めております。ぜひ多くの皆様のご参加をお待ちしております。

- 各発表の概要・要旨を本センターWebサイトに掲載しております。ぜひ、ご覧ください。
- 来年度の前定は次のとおりです。

日 時：平成29年11月30日（木） 9時50分～ （会場：福島県教育センター）
内 容：各種研究発表及び講演



福島県教育センター専門研修講座

「わかる!」「できる!」「変わる!」

福島県教育センターの専門研修講座にぜひ、お越しください。

本センターでは、学校現場における先生方の授業力向上や様々な教育課題への対応に役立つ専門研修講座を行っております。専門研修講座は希望制であり、旅費は各学校の旅費とは別途に確保されています。講座には教科・教科外教育に関するもの、教育相談に関するもの、情報教育に関するものなど様々な分野をそろえています。次年度は次期学習指導要領の改訂を踏まえた講座の充実を図るなど全47講座を実施予定です。

○ 次期学習指導要領の内容を踏まえた講座

アクティブ・ラーニングにつながる小学校国語科指導力向上講座
アクティブ・ラーニングにつながる中学校国語科指導力向上講座
アクティブ・ラーニングにつながる PISA 型読解力研究講座
アクティブ・ラーニングにつながる小学校理科講座
アクティブ・ラーニングにつながる中学校理科講座
アクティブ・ラーニングにつながる英語指導講座
算数的活動の充実を図る授業づくり講座
数学的活動の充実を図る授業づくり講座
資料の活用・データの分析（統計）における数学の指導力向上講座
主権者教育の実践に向けた授業づくり講座
特別な支援を必要とする児童生徒のための体育指導講座
授業力向上のための ICT 活用基礎講座
「特別の教科 道徳」の授業づくり講座
自尊感情を育む特別活動指導力向上実践講座 等

○ 福島県の教育課題を受けた講座

人間関係づくりに生かす予防・開発的教育相談講座
グループウェアで活用する G Suite for Education 基礎講座
情報モラル教育指導者実践講座
防災・放射線教育指導力向上講座 等